9.1_(金)

第605回 名曲シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール/19時開演

Popular Series, No. 605 Friday, 1st September, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮/ヤツェク・カスプシク Conductor JACEK KASPSZYK P.7
ヴァイオリン/ギドン・クレーメル Violin GIDON KREMER P.11
チェロ/ギードレ・ディルヴァナウスカイテ
Cello GIEDRE DIRVANAUSKAITE P.11

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ヴァインベルク ポーランドのメロデイ 作品47 no.2 [約13分] P.13 WEINBERG / Polish Melodies, op. 47 no. 2

- I . Adagio Allegro
- II. Andantino
- III. Allegro
- IV. Allegro moderato

フィリップ・グラスヴァイオリンとチェロのための

GLASS / Double Concerto for Violin, Cello and Orchestra (Japan premiere)

- I. Duet No. 1 II. Part One III. Duet No. 2 IV. Part Two
- V. Duet No. 3 VI. Part Three WI. Duet No. 4

[休憩 Intermission]

ムソルグスキー (ラヴェル編) 組曲 〈展覧会の絵〉 [約35分] ------- P.15 MUSSORGSKY (arr. RAVEL) / Pictures at an Exhibition

プロムナード - I. グノームス(こびと) - プロムナード

- Ⅱ. 古城 プロムナード
- Ⅲ. テュイルリー (遊びの後の子供たちの喧嘩)
- IV. ビドロ(牛車) プロムナード
- V. 殻をつけた雛鳥のバレエ
- VI. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ(金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)
- ₩. リモージュ (市場)
- Ⅲ. カタコンブ (古代ローマの地下墓地) 死せる言葉による死者への呼びかけ
- Ⅳ. 鶏の足の上の小屋 (バーバ・ヤガー=民話上の妖婆)
- X. キエフの大門

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) [事業提携] 東京芸術劇場



※本公演では日本テレビの収録および独アクサンタスによる撮影が行われます。

9.6 [*]

第571回 定期演奏会 東京芸術劇場コンサートホール/19時開演

Subscription Concert, No. 571 Wednesday, 6th September, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮/ヤツェク・カスプシク Conductor JACEK KASPSZYK P.7
ヴァイオリン/ギドン・クレーメル Violin GIDON KREMER P.11
コンサートマスター/荻原尚子 Concertmaster NAOKO OGIHARA

ヴァインベルク ヴァイオリン協奏曲 ト短調作品67 (日本初演) [約29分] P.16 WEINBERG / Violin Concerto in G minor, op. 67 (Japan premiere)

- I . Allegro molto
- II. Allegretto
- II. Adagio
- IV. Allegro risoluto

「休憩 Intermission]

ショスタコーヴィチ 交響曲 第4番 ハ短調 作品43 [約62分] -------- P.18 SHOSTAKOVICH / Symphony No. 4 in C minor, op. 43

- I. Allegretto poco moderato Presto
- II. Moderato con moto
- II. Largo Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

[協力] アフラック

[事業提携] 東京芸術劇場



9.16 [±]	第200回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール/14時開演 Saturday Matinée Series, No. 200 Saturday, 16th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
9.17 _[H]	第200回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール/14時開演 Sunday Matinée Series, No. 200 Sunday, 17th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
9.18 [я-ж]	第98回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール/14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 98 Monday, 18th September, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮/コルネリウス・マイスター(首席客演指揮者) Principal Guest Conductor CORNELIUS MEISTER ピアノ/ダニール・トリフォノフ Piano DANIIL TRIFONOV ---P.12 コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

スッペ 喜歌劇〈詩人と農夫〉序曲 [約10分] …… P.20 SUPPÉ / "Dichter und Bauer" Overture

プロコフィエフ ピアノ協奏曲 第2番 ト短調作品16 [約31分] …… P.21 PROKOFIEV / Piano Concerto No. 2 in G minor, op. 16

I. Andantino II. Scherzo: Vivace II. Allegro moderato

IV. Finale: Allegro tempestoso

「休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68 〈田園〉[約39分] ····· P.22 BEETHOVEN / Symphony No. 6 in F major, op. 68 "Pastorale"

- I. 田舎に到着した時の愉快な感情の目覚め
- Ⅱ. 小川のほとりの情景
- Ⅲ. 田舎の人々の楽しい集い
- IV. 雷雨・嵐
- V. 牧人の歌~嵐のあとの喜びと感謝の気持ち

「主催」読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

[事業提携] 東京芸術劇場 (9/16、17)

[協力] 横浜みなとみらいホール (9/18)



第15回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール/19時30分開演(19時から解説)

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です

《長原幸太らによる室内楽》

ヴァイオリン/長原幸太 (読響コンサートマスター)、瀧村依里 (首席) Violin KOTA NAGAHARA (YNSO Concertmaster), ERI TAKIMURA (Principal)

ヴィオラ/鈴木康浩 (ソロ・ヴィオラ)、渡邉千春 Viola YASUHIRO SUZUKI (Solo Viola), CHIHARU WATANABE

チェロ/髙木慶太、富岡廉太郎(首席/契約団員)

Cello KEITA TAKAGI, RENTARO TOMIOKA (Principal / On trial)

ナビゲーター/鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)

ベートーヴェン 交響曲 第8番 へ長調作品93 (弦楽五重奏版) [約26分] BEETHOVEN / Symphony No. 8 in F major, op. 93 (string quintet version)

- I. Allegro vivace e con brio
- II. Allegretto scherzando
- II. Tempo di Menuetto
- IV. Allegro vivace

「休憩 Intermission]

ブラームス 弦楽六重奏曲 第1番 変ロ長調作品18 [約38分] BRAHMS / String Sextet No. 1 in B flat major, op. 18

- I. Allegro ma non troppo
- II. Andante ma moderato
- III. Scherzo: Allegro molto
- IV. Rondo: Poco allegretto e grazioso

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

9.30

第6回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩大ホール/15時開演

Parthenon Popular Series, No. 6 Saturday, 30th September, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center

指揮/ハンスイェルク・シェレンベルガー

Conductor HANSIÖRG SCHELLENBERGER P.10

ピアノ/小山実稚恵 Piano MICHIE KOYAMA ------P.12

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調作品73 〈皇帝〉[約38分] ····· P.23 BEETHOVEN / Piano Concerto No. 5 in E flat major, op. 73 "Emperor"

- I. Allegro
- II. Adagio un poco mosso
- II. Rondo: Allegro

「休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 **短調 作品95 〈新世界から〉[約40分] ····· P.24 DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

- I. Adagio Allegro molto
- II. Largo
- ■. Molto vivace
- IV. Allegro con fuoco



[主催] 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社 「助成」平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業



ヤツェク・ カスプシク

Jacek Kaspszyk

ポーランドが誇る名匠 クレーメルと共演

名門ワルシャワ・フィルの音楽 監督を務めるポーランドの名匠 が、ヴァイオリンの巨匠クレーメ ルと共演し、母国生まれの作曲 家ヴァインベルクのヴァイオリン 協奏曲を日本初演する。ショス タコーヴィチの交響曲第4番も 注目だ。

1952年ポーランド東部のビャワ・ポド ラスカ生まれ。ワルシャワのショパン音 楽大学で指揮と作曲を修め、77年にカ ラヤン国際指揮者コンクールで3位に入 賞して注目された。その後、ポーランド 国立放送響の首席指揮者、音楽監督、 北オランダ・フィルの首席指揮者などを 経て、98年から2005年までポーランド 国立歌劇場の音楽監督、芸術総監督を 務めるなど、名実共にポーランドを代表 する指揮者として活躍する。13年にワル シャワ・フィルの音楽監督に就任した。

ベルリン・フィル、バイエルン放送響、



パリ管をはじめとする一流オーケストラ のほか、ベルリン・ドイツ・オペラ、リヨ ン国立歌劇場、チューリヒ歌劇場などの 名門オペラにも客演し、コンサートとオ ペラの両方で高い評価を得ている。ピ アニストのアルゲリッチやツィメルマンら 著名なソリストとの共演も多く、20世紀・ 現代音楽にも精力的に取り組んでおり、 とくにシマノフスキやルトスワフスキなど ポーランドの作曲家の作品の指揮では 定評がある。

読響とは1989年以来、28年ぶりの 共演となる。

- ◇9月1日 名曲シリーズ
- ◇9月6日 定期演奏会

コルネリウス・ マイスター

(首席客演指揮者) Cornelius Meister

祝! 首席客演就任 若き才能に期待

ドイツ、オーストリアを中心に 活躍する人気抜群の若手指揮 者。2017年4月に読響首席客演 に就任後、初の舞台となる今回 のメインプログラムは、ベートー ヴェンの〈田園〉交響曲。誰もが 知る名曲に、きっと新たな生命 を吹き込んでくれるだろう。

1980年ドイツ・ハノーファー生まれ。ハ ノーファー音楽大学でピアノと指揮を学 び、21歳でハンブルク国立歌劇場にデビ ューを果たした。2005年に24歳の若さ でハイデルベルク市立劇場の音楽総監 督に就任し、12年までその職にあった。 10年からウィーン放送響の首席指揮者 兼芸術監督を務めている。ウィーンのム ジークフェライン (楽友協会) やコンツェ ルトハウスなどでのコンサートをはじめ、 日本を含む世界各地へのツアーやレコー ディングなど、その積極的な活動は高く 評価されている。読響とは14年に初共



演し、R.シュトラウス〈アルプス交響曲〉 でスケールの大きな演奏を聴かせた。

これまでにロイヤル・コンセルトヘボ ウ管、バイエルン放送響、パリ管などに 客演しているほか、オペラではウィーン 国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ミ ラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラな どに登場。日本では06年に新国立劇 場で〈フィデリオ〉を指揮している。18 年からカンブルランの後任として、ドイ ツのシュトゥットガルト歌劇場の音楽総 監督に就任する。

> ◇ 9月16日 土曜マチネーシリーズ ◇9月17日 日曜マチネーシリーズ ◇9月18日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

首席客演指揮者

Principal Guest Conductor

Cornelius Meister

コルネリウス・マイスター からのメッセージ



©Marco Borggreve

読売日本交響楽団は、素晴らしいサウンドを奏でるオーケストラで す。私たちはこれから、ベートーヴェン、マーラー、その他いろいろな 作曲家のたくさんの音楽を一緒に作り上げていきます。

この素晴らしいオーケストラと共演することは、私にとってこの上な い喜びです。首席客演指揮者であることを大変光栄に思います。

12月には、マーラーの交響曲第3番を演奏します。マーラーの音楽は、 常に単なる音楽以上のもの――さまざまな矛盾、幸福、悲しみの中にあ る人間、そしてこの世界と自然界にあって人間の役割とは何か――につ いて描き出しています。この宇宙に、読売日本交響楽団とお客様と一緒 に飛び込んでいきます。

日本のお客様の卓越した能力と知識に、私はいつも感動しています。 音楽の持つ、国境を越えて文化を結ぶ力をともに楽しめる時、私は心が 温まり幸せな気持ちになります。

会場で皆さんにお会いできることを楽しみにしています!

コルネリウス・マイスター

ハンスイェルク・シェレンベルガー

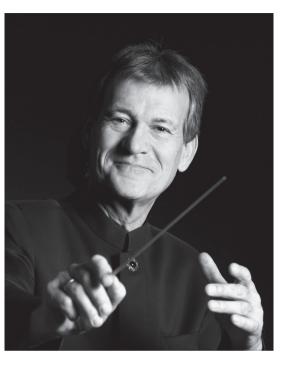
Hansjörg Schellenberger

オーボエの世界的名手初めて読響を振る

20年にわたってベルリン・フィルの首席奏者を務め、ソリストとしてもたびたび来日したオーボエの名手が、指揮者として読響に初登場する。音楽に対する理知的でバランスの取れたアプローチが聴きものだ。

1948年ドイツ・ミュンヘン生まれ。ミュンヘン音楽大学でオーボエを学び、72年にミュンヘン国際音楽コンクールで2位に入賞した。75年にケルン放送響首席奏者となった後、カラヤンの招きでベルリン・フィルへ移り、80年に同フィル首席奏者に就任。2001年まで21年間にわたって同ポストを務めた。ソリストとしてカラヤン、ジュリーニ、アバド、レヴァイン、ムーティといった巨匠と共演を重ね、多くの録音を残したほか、室内楽でも高い評価を得た。

1990年代半ばから本格的に指揮活動を始め、ザールブリュッケン・カイザー



スラウテルン・ドイツ放送フィルやカメラータ・ザルツブルク、ローマ・サンタチェチーリア管などに客演し、注目される存在となった。日本でも2000年代以降、NHK響や日本フィル、東京フィルなどの指揮台に立ち、オーボエの吹き振りなどで聴衆を沸かせた。

3年に一度開かれる国際オーボエコンク ール・軽井沢の審査委員長を20年以上務 めるほか、自身のCDレーベル"カンパネ ラ・ムジカ"を設立するなど、幅広い活躍 を続けている。現在、岡山フィル首席指揮 者、ソフィア王妃高等音楽院教授を務める。

◇9月30日 パルテノン名曲シリーズ



ヴァイオリンギドン・クレーメル

Violin Gidon Kremer

孤高の音楽を奏でるヴァイオリンの世界的巨匠が、ライフワークとして取り組む作曲家、ヴァインベルクのヴァイオリン協奏曲を日本で初披露する。

1947年リガ生まれ。モスクワ音楽院でオイストラフに師事した後、70年のチャイコフスキー・コンクールで優勝。独創的な演奏解釈と技巧でたちまち世界的名声を確立した。カラヤン、バーンスタイン、アバド、小澤征爾、メータらの指揮で世界の一流オーケストラと共演を重ね、室内楽でも活躍。近年は若手の育成にも力を注いでいる。

読響とは31年ぶりの共演となる。

◇9月1日 名曲シリーズ ◇9月6日 定期演奏会



チェロ ギードレ・ディルヴァナウスカイテ Cello Giedre Dirvanauskaite

クレーメルが創設したアンサンブル「クレメラータ・バルティカ」のチェリストであり、ソリストとしても活躍している。リトアニアのカウナスに生まれ、ロストロポーヴィチやゲリンガスのマスタークラスで学んだ後、ロッケンハウス音楽祭に招かれ、クレーメルらとのアンサンブルで注目された。リトアニア国立響、リトアニア室内管などに所属し、室内楽でアルゲリッチ、アファナシエフ、バシュメット、ホリガーらと共演を重ねた。最新の録音は、クレーメル、ピアノのトリフォノフとのトリオ(ドイツ・グラモフォン)。読響とは初共演。

◇9月1日 名曲シリーズ



ピアノダニール・トリフォノフ

Piano Daniil Trifonov

ロシアの新世代を代表する若手ピアニス ト。深い叙情と激しい情熱、卓越したテク ニックで多くのファンを持つ。1991年ロシア のニジニ・ノブゴロド生まれ。モスクワの名 門グネーシン音楽院に学び、アメリカ・クリ ーヴランド音楽院で名教師ババヤンに師事 した。2010年のショパン・コンクールで3位 に入賞して注目を集め、翌11年のチャイコ フスキー・コンクール優勝によって一躍世界 的名声を獲得した。ゲルギエフをはじめと する著名指揮者、一流オーケストラと共演 を重ね、カーネギーホールなど世界各地で リサイタルを行っている。読響とは初共演。

> ◇9月16日 土曜マチネーシリーズ ◇9月17日 日曜マチネーシリーズ ◇ 9月18日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



ピアノ小山実稚恵

Piano Michie Koyama

チャイコフスキー、ショパンの二大国際 コンクールに入賞以来、常に第一線で活躍 し続けている。2006年から全国6都市で 行ってきた"12年間・24回リサイタル・シ リーズ"が、今秋いよいよ最終回を迎える。 ソニーとの30枚目のCDは、初のバッハア ルバム「ゴルトベルク変奏曲」で、「レコー ド芸術」の特選盤に選ばれた。著書『点 と魂と――スイートスポットを探して』が KADOKAWAより出版されている。05 年度文化庁芸術祭大賞、13年度東燃ゼ ネラル音楽賞、レコード・アカデミー賞、 15年度文化庁芸術祭優秀賞、16年度芸 術選奨音楽部門文部科学大臣賞を受賞。

◇9月30日 パルテノン名曲シリーズ



柴汁純子(しばつじじゅんこ)・音楽評論家

ヴァインベルク

ポーランドのメロディ 作品47 no.2

作曲:1949年/初演:1950年12月13日、モスクワ/演奏時間:約13分

ポーランドの作曲家ミェチスワフ・ヴ ァインベルク (1919~96) は、ワルシ ャワのユダヤ人家庭に生まれた。1939 年にナチスがポーランド侵攻に及ぶと ソ連領のミンスクへ逃げ、その後、タ シケントに移り住んだ。ワルシャワで 別れた家族は強制収容所で亡くなり、 ただひとり生き残った若き作曲家に手 を差し伸べたのはショスタコーヴィチ だった。1943年にモスクワに移住す ると、13歳年上の作曲家と互いにス コアを見せ合い、ピアノ・デュオを楽 しむなど親しい付き合いが続いた。

しかし、モスクワも安住の地ではな かった。特にスターリン支配の最後の 5年間(1948~53)は、常に黒い影に 付きまとわれた。1949年には複数の作 品が演奏禁止の通告を受け、1953年に

逮捕された際は死をも覚悟した。それ でも作曲の筆を止めず、この時期は、 オペラや交響曲といった大規模な作品 は避け、室内楽曲や民俗的な意識を表 明した作品を集中的に書いた。

1949年に作曲された作品47は、4曲 の管弦楽曲から成り、第1番と第3番 は当時ソ連支配下にあったモルドバに、 この第2番は、ポーランドの民俗舞曲 に由来する素材が用いられた。第1曲 「アダージョ~アレグロ| ホルンの響 きで導かれる序奏に、おどけた表情の 主部が続く。第2曲「アンダンティー ノ オーボエの憂いを帯びた旋律で始 まるゆるやかなワルツ。第3曲「アレ グロー ポルカ風の陽気な音楽。第4 曲「アレグロ・モデラート 力強く 華やかなマズルカで全曲を締め括る。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、 チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、タンブリン、小太鼓、シンバル、大太鼓、グロッケンシュピール)、ハ ープ、弦五部

フィリップ・グラス

ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 (日本初演)

作曲: 2010年/初演: 2010年4月22日、デン・ハーグ/演奏時間: 約30分

アメリカのフィリップ・グラス (1937 ~) は、スティーヴ・ライヒやテリー・ライリーらとともにミニマル・ミュージック (極度に切り詰めた音素材で、パターン化された音型やリズム型を反復して構成する音楽)を代表する作曲家である。今年生誕80年を迎え、1月にはニューヨーク・カーネギーホールで記念の演奏会が開かれ、交響曲第11番 (2016) が世界初演された。アメリカ国内はもとより、今年は国外でも彼の作品を特集する企画が目立ち、読響では3月のヴァイオリン協奏曲第1番 (1987) に続いて、グラスの大規模な協奏曲を取り上げる。

ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲は、オランダの舞踊団ネザーランド・ダンス・シアター (NDT) の委嘱で作曲された。1999年まで芸術監督を務めた振付家イリ・キリアンによって世界的なダンスカンパニーとなったNDTは、バッハからドビュッシー、ストラヴィンスキー、そして現代音楽までクラシック音楽と深く結びついたダンスを創作している。グラスの音楽はキリアンの時代から使われ、それ以後

もライトフットとレオンの共同振付による「サイニング・オフ」(2003)でヴァイオリン協奏曲第1番が用いられた。今回NDTはオーケストラ曲を依頼したが、グラスの意向で二つの独奏楽器をもつ協奏曲となった。そしてグラスの音楽と上記二人の振付で完成させた「スワン・ソング」(2010)は、過去と現在の記憶と未来への希望が描かれ、この作品で引退したポーランド出身のダンサー、ステファン・ゼロムスキーに捧げられた。

全体は7曲で構成され、独奏楽器の 二重奏による4曲の"デュエット"と 管弦楽主体の3曲の"パート"が交互 に配置されている。"デュエット"は、 ゆるやかに揺れ動く音楽で、二つの楽 器は重なり対話し絡み合う。第3番で は気分の高揚もみられるが、最後はあ っけなく断ち切られ、第4番は静かな 余韻を残す。一方、"パート"では、パ ート1は管弦楽の力強い反復から独奏 楽器が浮かび上がり、パート2は二つ の楽器が寄り添い、優しい語り口で始 まる。パート3は力強い反復が次第に 熱を帯び、独奏楽器が自在に駆け巡る。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランベット3、トロンボーン 3、打楽器(グロッケンシュピール、マリンバ、シロフォン、トライアングル、シンバル、タンブリン、カウベル、銅鑼、ウッドブロック、マラカス、アンビル、小太鼓、テナードラム、トムトム、大太鼓)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ

ムソルグスキー(ラヴェル編)

組曲〈展覧会の絵〉

作曲: 1874年、編曲: 1922年/初演: 1922年10月19日、パリ(ラヴェル編曲版)/演奏時間: 約35分

ロシア国民楽派「五人組」のひとりモデスト・ムソルグスキー(1839~81)は、ロシア民謡由来の音階や和声を巧みに用い、その秀でた描写力と風刺の才能で数々の作品を手がけた。ピアノ組曲〈展覧会の絵〉は、急逝した友人の画家で建築家のヴィクトル・ハルトマン(1834~73)の回顧展で得た印象をもとに3週間足らずで書き上げた。

しかしこの作品は、作曲家の生前に演 奏されることはなく、1886年にようやく リムスキー=コルサコフ校訂の楽譜が出 版された。そして1922年に指揮者クーセ ヴィッキーがパリ・オペラ座で初演するた めに、モーリス・ラヴェル(1875~1937) に依頼して編曲版が作られる。ラヴェル は、原曲の第6曲と第7曲の間のプロム ナードを削除するなど若干の手を加え、 原曲の粗野な味わいを残しながらも、 「管弦楽の魔術師 | と言われたこの作 曲家らしい洗練された音楽に仕上げた。 プロムナード:ロシア的な五音音階の 主題がトランペット独奏で奏される。 第1曲 "グノームス" タイトルはラテ ン語。こびとの不気味な姿が描かれる。 プロムナード: 主題はホルンに現れる。

第2曲 "古城" ファゴットに導かれ、 サクソフォンが哀しげな旋律を歌う。 プロムナード: 重々しい響きとなって

再びトランペットに主題が現れる。 第3曲 "テュイルリー" フランスの庭

園で子供たちが遊んでいる様子。

第4曲 "ビドロ" ポーランドの牛車。 チューバ独奏で重々しく進む。

プロムナード:寂しげな木管の響き。 第5曲 "殻をつけた雛鳥のバレエ"ユーモラスな木管楽器主体のスケルツォ。 第6曲 "サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ" 二人のユダヤ人の会話。威圧的な態度と卑屈な性格が音楽の対比で描かれる。

第7曲 "リモージュ" フランスの市場 の喧騒。そこでは噂話も聞こえる。

第8曲"カタコンブ"古代ローマの墓。 金管楽器の和音が不気味に響く。続く "死せる言葉による死者への呼びかけ" はプロムナードの変奏である。

第9曲 "鶏の足の上の小屋" 伝説の魔術師のグロテスクな音楽。

第10曲 "キエフの大門" 管弦楽全体 が巨大な鐘のように鳴り響く。

楽器編成/フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ (バリトン)、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデット・シンバル、小太鼓、ムチ、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、チューブラーベル)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

9.6 [末]

マリーナ・チュルチェワ 元チャイコフスキー博物館学芸員

ヴァインベルク

ヴァイオリン協奏曲ト短調作品67(日本初演)

作曲:1959~60年/初演:1961年2月12日、モスクワ/演奏時間:約29分

ミェチスワフ・ヴァインベルク(1919 ~96)は、ポーランドのワルシャワに 生まれ、モスクワで没した作曲家。1980 年代以降忘れられた存在となっていた が、近年急速な再評価が起きている。

当初ワルシャワ音楽院でトゥルチンスキにピアノを師事。目覚ましい才能を発揮し、里帰り公演中にその演奏を聴いた大ピアニストのヨゼフ・ホフマンが、自分の許で学ぶように誘ったという。それが実現していたら、アメリカでピアニストの道を歩んでいたかもしれない。

しかし、1939年のナチスのポーランド侵攻の際、彼は間一髪でベラルーシへ逃れたものの、家族や親戚はすべて殺されてしまった。2年間ミンスク音楽院で作曲を学んだ後、中央アジア、ウズベキスタンの首都タシケントへ移った。ここでユダヤ人演出家ミホエルスの娘ナターリヤと知り合い結婚した。

1943年にショスタコーヴィチの招 きでモスクワへ来て、作曲活動を始め るが、ここで2度目の生命の危機を迎 える。スターリンの反ユダヤ政策により義父ミホエルスが暗殺され、ヴァインベルクも何ら罪状のないまま逮捕、死刑が求刑された。絶体絶命の窮地に追い込まれたが、スターリンの急逝で奇跡的に難を逃れた。釈放のため獄舎へ来た兵士を見た彼は、最期の時と観念して、自由になれることを信じようとしなかったという。

ヴァインベルクは生涯に7作の歌劇、 未完を含む22曲の交響曲、17曲の弦楽 四重奏曲をはじめ、作品番号154に及 ぶ純音楽作品に加え、65本の映画音 楽、ラジオやテレビのための音楽も数 多く、特に後者は旧ソ連の大衆に親し まれた。作品の大半はコンドラシン、 バルシャイ、ザンデルリンク、フェド セーエフら指揮者、ボロディン四重奏 団、ギレリス、ロストロポーヴィチら のソリストに献呈され、彼らが演奏し た。

作風はソヴィエト音楽の手法により ながらも、ユダヤ的な色彩とショパン に通じるポーランド的な詩情が独自の世界を作っている。本人はいたって物静かでシャイだったが、音楽はエネルギッシュなアクの強さに満ちている。半世紀以上もロシアに暮らしながら、終生きついポーランド訛りが抜けず、完成された最後の交響曲第21番〈カディッシュ〉をワルシャワ・ゲットーの犠牲者に捧げ、ショパンのバラード第1番の感動的な引用で終わらせた。ついぞ戻ることはなかったが、故国ポーランドへの思いはとても強かった。

彼はショスタコーヴィチの弟子と書かれることが多いが、可愛がられ引き立てられたものの師事はしていない。ショスタコーヴィチは彼を数少ない心の開ける友として信頼し、いくつかの作品でむしる影響を受けさえしている。

ヴァインベルク自身はピアノを学んだが、父はワルシャワのユダヤ劇場のヴァイオリニストだったうえ、ユダヤ人の楽師がヴァイオリンを奏でるのを聴いて育った。彼にとってヴァイオリンはユダヤ人の魂の声であり、過去の記憶や感情を綴るのに最適の特別な楽器とみなしていた。それはこの協奏曲にも存分に示されている。

交響曲風な4楽章構成による。オーケストラとの掛け合いは少なく、ヴァイオリンは休みなく技巧的なパッセー

ジを弾き続ける。レオニード・コーガンに献呈され、彼の独奏、ロジェストヴェンスキー指揮モスクワ・フィルにより初演された。以後誰も手をつけなかったが、近年クレーメルが蘇演しにわかに脚光を浴びるようになった。

第1楽章 アレグロ・モルト、ト短調ファンファーレ調の第1主題が決然と提示され精力的に進む。メロディアスな第2主題はハープとチェレスタなど高音部が支える。何かに取り憑かれたようなボルテージの高い音楽が続く。

第2楽章 アレグレット、ホ長調(主部は嬰ヘ短調) ポーランド舞曲クヤヴィアクのリズムによる民謡風なメロディが歌い継がれる。全体に不安な緊張感が横溢している。最後に短いカデンツァを経て、休みなく第3楽章へ入る。

第3楽章 アダージョ ハ長調だが、

ポーランドの民俗音楽に多い第4音が

半音高いリディア調による。ユダヤの

子守歌風の優しいメロディを歌い継ぐ。 第4楽章 アレグロ・リゾルート、ト 長調 三つの主題によるロンド。一つ 目は行進曲調で、ヴァインベルクが暮 らした大戦間のワルシャワで流行して いた音楽を思わせる。二つ目は彼の真 骨頂たるユダヤ舞曲。コーダでは第1 楽章の第1主題が再現するが、もはや

焦燥感はなく、浄化されてPPPでト

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、銅鑼、シロフォン)、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ショスタコーヴィチ

交響曲 第4番 ハ短調作品43

作曲:1935~36年/初演:1961年12月30日、モスクワ/演奏時間:約62分

ドミトリー・ショスタコーヴィチ (1906~75) は、帝政時代末期のロシアに生まれた。革命の勃発した1917年には11歳で、その人生はまさにソ連の歴史とともに歩んだものだった。

19歳で交響曲第1番を発表すると、「ソ連が生んだ最初の天才」と絶賛された。その後、交響曲第2番〈十月革命に捧ぐ〉、第3番〈メーデー〉、バレエ音楽〈ボルト〉〈明るい小川〉、歌劇〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉など、社会を見据えつつも現代感覚に溢れる才気煥発な作品を次々と産み出し、創作活動は順風満帆のように見えた。

しかし、1936年1月にボリショイ劇場で〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉を観たスターリンが途中退席し、2日後にこれが、また9日後には〈明るい小川〉が新聞「プラウダ」紙上で激しく批判された。「人民の敵」となったショスタコーヴィチは身の危険を感じ、準備中だった交響曲第4番の初演を撤回した。

交響曲第4番は1935年9月13日に着 手され、翌年5月20日に完成した。い つもは速筆なショスタコーヴィチが8か 月を要し、途中で意に沿わず没にした5 分半ほどの断章も存在している。いか に気負いが大きかったかがうかがえる。 第2次世界大戦中に自筆スコアは失われたが、助手のアトヴミヤンが残されたパート譜と作曲者自身による1946年の2台のピアノ用編曲の楽譜から復元した。

ショスタコーヴィチは2年後の1937年に改心し、交響曲第4番とは正反対の体制迎合したような作風の第5番を作曲、初演は空前の成功を収めた。それ以降、ショスタコーヴィチの作風は社会主義リアリズムへと転換した。しかし交響曲第4番には、国策とは無縁の彼が本当に目指した道を恐れることなくすべて示しており、ロジェストヴェンスキーを筆頭に「ショスタコーヴィチの最高傑作」と評する向きも多い。

ショスタコーヴィチはマーラーを崇拝し、その影響を強く受けていた。交響曲第4番は規模も内容も、最もマーラー的ということができる。3楽章構成だが演奏時間は60分を超え、第1楽章と第3楽章はともに通常の交響曲一つ分の長さに相当する。楽器編成も各6本のフルート(ピッコロ含む)、クラリネット、4本のオーボエ、8本のホルン、2台のハープとチェレスタを含み、純器楽作品ながら約134人の奏者を要する。

彼はシリアスな壁画的大作をものする 一方、軽妙で皮肉の効いた音楽も得意と した。交響曲第4番はその両面が最大限に発揮され、彼の作品中でも特に尖った内容となっている。その、人を小馬鹿にしたような感覚こそ「プラウダ」紙で批判された要素のひとつで、もし発表していればやはり問題になっていたはずだ。全楽章が消沈して終わるのも、社会主義建設の思想にそぐわなかった。

結局初演は、予定から25年を経た1961年にコンドラシンの指揮によりモスクワで行われた。ゆえに交響曲第12番〈1917年〉と第13番〈バビ・ヤール〉の間に登場した作品ともいえる。

1936年5月、当時レニングラードを訪 間中の大指揮者クレンペラーがこの曲に 興味を示し、ショスタコーヴィチがピア ノで披露したところ演奏を切望したとい う。ただし6人の優秀なフルート奏者を 集めるのは困難ゆえ、数を減らすことを 提案した。しかしショスタコーヴィチは ゆずらず、企画は水泡に帰したという。ク レンペラーが国外で紹介していれば、こ の作品の運命も変わっていたに違いない。 第1楽章 アレグレット・ポコ・モデラ ート~プレスト、ハ短調 ソナタ形式。 強烈な序奏の後、威圧的な行進が始ま る。オーケストラの音圧、シロフォンの 革新的な用い方も効果満点。やがてカ ッコウの囀りが聞こえ軽やかな舞曲調 を経て、弦楽の猛烈な凍さによるフガ

オーケストラの名技性も要求される驚 愕の音世界を作る。その後ワルツ、行 准と続き、鳥の囀りのなか消えてゆく。 第2楽章 モデラート・コン・モート ロンド形式によるスケルツォ。A主題 は20世紀風メヌエット。B主題は低 弦のオスティナート上でヴァイオリン がメロディを奏する。この主題は交響 曲第5番に流用された。Aが弦楽の精 妙なフーガで復帰し、木管が受け継 ぐ。さらにBが全合奏で現れるが、冒 頭の問いに民衆が同調するかのようで ある。しかしそれも弱まり、カスタネ ット、ウッドブロック、小太鼓による リズムの呼応が延々と続く。これは監 獄の政治犯たちが暖房用配管を叩いて 交信する様子を描いたともいわれる。 第3楽章 ラルゴ~アレグロ、ハ短調 葬送行進曲風に始まり、壮大に盛り上 がった後、アレグロに転じショスタコ ーヴィチの才気煥発ぶりが炸裂する。 モーツァルトの〈魔笛〉のパパゲーノ のアリア、R. シュトラウスの 〈ばらの 騎士〉のワルツをはじめ、同時期の自 作ピアノ協奏曲第1番や〈ムツェンス ク郡のマクベス夫人〉などの引用が万 華鏡のように煌めく。しかし最後は静

かになり、マーラーの〈大地の歌〉の

ようなチェレスタの瞬きで終わる。

ートが始まる。戦慄に満ちた暴力性で、

楽器編成/フルート4、ピッコロ2、オーボエ4 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット4、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット 3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット4、トロンボーン3、チューバ2、ティンバニ2、打楽器 (シロフォン、グロッケンシュピール、小 太鼓、ウッドブロック、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、シンバル、カスタネット、大太鼓、銅鑼)、ハープ2、チェレスタ、弦五部 9.16 (±)

9.17 [H]

9.18 [月‧祝]

飯尾洋一(いいおよういち)・音楽ライター

スッペ

喜歌劇〈詩人と農夫〉序曲

作曲: 1846年/初演: 1846年8月24日、ウィーン/演奏時間: 約10分

フランツ・スッペ (1819~95) はウ ィーンでオペレッタの分野で成功を収 めた作曲家である。当初医学を志すも ウィーンで音楽に専心し、ヨーゼフシ ユタット劇場での活躍で名声を獲得し た後、アン・デア・ウィーン劇場やカ ール劇場の楽長を務めている。軽快で 流麗なスタイルによって一世を風靡し た。イタリアのオペラ作曲家ドニゼッ ティとは遠縁にあたり、ウィーンを訪 れたドニゼッティから激励を受けるな ど、親交を結んでいる。地方の劇場で はスッペは歌手としても舞台に立ち、 1842年にはエーデンブルクでドニゼ ッティの〈愛の妙薬〉のドゥルカマー ラ役を歌っている。

喜歌劇〈詩人と農夫〉序曲はスッペの代表作のひとつ。もっとも劇本体は今日では失われており、そのストーリーは明らかではない。この序曲だけがもっぱら演奏されている。

金管楽器の厳かな冒頭部分に続いて 独奏チェロがのびやかな旋律を奏で る。嵐を思わせるような緊迫したアレ グロが続き、にぎやかな行進曲が鳴り 響く。優美なワルツが登場すると、ワ ルツと行進曲を交互にくりかえしなが ら次第に高潮する。

ちなみに、アメリカの短篇小説の名 手 O. ヘンリー(1862~1910)に『詩 人と農夫』という同名の一篇がある。 生粋の都会人の詩人が戯れに自然の情 景を詩に書きあげると、編集者から真 に迫った表現だと讃えられる一方、都 会に出てきた農夫があまりにも田舎じ みたふるまいゆえに都会人の変装だと 勘違いされる……といったおかしな筋 立てを持つ。O. ヘンリーがスッペの 喜歌劇を知っていた可能性は低そうだ が、詩人と農夫という対照的な登場人 物の物語がたどる展開は似たようなも のかも、と想像させられる。

楽器編成/フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シンバル、大太鼓)、ハープ、弦五部

プロコフィエフ

ピアノ協奏曲 第2番 ト短調作品16

作曲:1912~13年、1923年改訂/初演:1913年9月5日、パヴロフスク/演奏時間:約31分

「これが、わたしが心から願ってい た生徒だ!

ペテルブルク音楽院で入学試験官長を務めていたリムスキー=コルサコフは、「四つのオペラ、二つのソナタ、交響曲とたくさんのピアノ曲が入った二つの大きなフォルダー」を抱えて入ってきたセルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)を目にして、思わずこう叫んだ。

プロコフィエフは、リムスキー=コルサコフから管弦楽法を習ったものの、「授業からなにも学ぶものはなかった」と後に振り返っている。急進的な作風を模索する野心家プロコフィエフは、音楽院在学中にこのピアノ協奏曲第2番を作曲し、自身のピアノ独奏による初演で賛否両論の大騒動を巻き起こすこととなった。新聞にはこんな記事が掲載された。

「舞台にはペテルブルクの学生らしき若者があらわれた。ピアノの前に座り、鍵盤のほこりを払っているのか、もしくは鋭くドライなタッチでめちゃめちゃに叩いているのか、どちらかだった。聴衆はどう判断すべきか、さっ

ぱりわからなかった……」

ただし、当時の楽譜は革命騒ぎのなかで失われ、1923年に記憶をもとに復元した改訂版が現代に伝えられている。

プロコフィエフによれば、協奏曲には主に二つのタイプがあるという。一つはソロとオーケストラがよく溶け合っているが、演奏者にはあまりおもしろくないもの(例としてリムスキー=コルサコフの協奏曲)。もう一つはソロはすばらしいがオーケストラが単なる伴奏に終わってしまっているもの(具体例はショパン)。自身のピアノ協奏曲第2番は後者に属するというのだが、はたしてどうだろうか。

第1楽章 アンダンティーノ 物憂 げな第1主題とユーモラスな第2主題 によって組み立てられる。

第2楽章 スケルツォ、ヴィヴァーチェ トッカータ風の音楽が突進する。第3楽章 間奏曲、アレグロ・モデラート 重々しさのなかに冷ややかなユ

ーモアが漂う。

第4楽章 アレグロ・テンペストーソ エネルギッシュで爆発的なフィナー レ。急速なコーダは熱風のよう。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、タンブリン、小太鼓)、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン

交響曲 第6番 个長調作品68 〈田園〉

作曲:1807~08年/初演:1808年12月22日、ウィーン/演奏時間:約39分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) が残した九つの交響曲のなかでも、この〈田園〉は描写性の豊かさで異彩を放っている。ベートーヴェンは初演の際に用いられた第1ヴァイオリンのパート譜に「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出。絵画というよりも感情の表出」と記している。各楽章には標題が添えられた。

田舎で目にする自然の光景や人々の 生活を題材に交響曲を書くというアイ デアは、決してベートーヴェン独自の ものではない。たとえば、ベートーヴェンに先んじてクネヒトは〈自然の音 楽的描写〉を書いている。この作品が ベートーヴェンを触発した可能性は十 分にありそうだ。というのも、クネヒ トの作品もまた全5楽章からなり、第 1楽章に「美しい田舎。太陽は光り輝 き、風は穏やかに舞い、谷間では小川 が流れ、鳥たちがさえずる」といった 標題が添えられているからだ。

エマニュエル・レベル著の『ナチュール 自然と音楽』によれば、当時60作以上もの「田園交響曲」が書かれたという。これは逆説的にベートーヴェンの独創

性の高さを物語っているともいえるのではないだろうか。これほど多くの作品が書かれたにもかかわらず、現代のレパートリーに定着しているのはベートーヴェンのただ一曲なのだから。

第1楽章 "田舎に到着した時の愉快な感情の目覚め" アレグロ・マ・ノン・トロッポ のびのびとした大らかな主題が風光明媚な田園風景を想起させる。第2楽章 "小川のほとりの情景" アンダンテ・モルト・モート 流麗な楽想が小川のせせらぎを思わせる。終盤にフルートがナイチンゲール、オーボエがウズラ、クラリネットがカッコウの鳴き声を模倣する。

第3楽章 "田舎の人々の楽しい集い" アレグロ スケルツォに相当するひな びた舞曲。第3楽章から第5楽章まで は切れ目なく続く。

第4楽章 "雷雨・嵐" アレグロ 不 吉な遠雷が低弦でほのめかされる。ピッコロ、ティンパニ、トロンボーンが 加わり、猛烈な嵐が到来する。

第5楽章 "牧人の歌~嵐のあとの喜びと 感謝の気持ち" アレグレット 嵐は去 り、陶然とした喜びの牧歌が奏でられる。

楽器編成/フルート2、ビッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦五部



道下京子(みちした きょうこ)・音楽評論家

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉

作曲:1809年/初演:1811年11月28日、ライプツィヒ/演奏時間:約38分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) は、1792年に故郷のボンからウィーンへと移り住み、ハイドンやアルブレヒツベルガーらに作曲を学ぶ。レッスンや作曲だけでは生計を立てることが難しく、彼は音楽を愛する裕福な貴族から支援を受けていた。彼はピアノ協奏曲第5番を、ルドルフ大公に捧げる。大公はベートーヴェンの支援者にして、彼の作曲とピアノの弟子でもある。

ピアノ協奏曲第5番は、交響曲第5番や交響曲第6番などに続けて作曲されており、彼の創作意欲の高まった時期の作品。華々しいピアノの独奏で始まるこの協奏曲は、その後のロマン派のヴィルトゥオーソ協奏曲の先駆けである。第4番までのピアノ協奏曲の初演では、ベートーヴェンが自らピアノを演奏した。しかし聴力の悪化に伴い、第5番の初演はフリードリヒ・シュナイダーが行った。なお、〈皇帝〉と

いうタイトルは、出版者のクラマーが ピアノ協奏曲第5番の堂々とした風格 にちなんで名づけたもの。

第1楽章 アレグロ 変ホ長調 圧 倒的な迫力が印象的だ。彼の第4番の ピアノ協奏曲と同じく、第1楽章はピ アノ独奏で開始する。ただし、作品の 内容を統一すべく、ピアニストによる 即興的なカデンツァではなく、ベート ーヴェン自らカデンツァを作曲した。 第2楽章 アダージョ・ウン・ポコ・

モッソ ロ長調 変奏曲形式。夢幻的 な叙情性に満ちあふれた楽章。曲の 終わりで、第3楽章の主題を暗示させ ながら、途切れることなく第3楽章へ入る。

第3楽章 ロンド:アレグロ 変ホ 長調 この楽章は、第1楽章のはじめ に現れる分散和音を活かしたロンド主 題で始まる。ピアノ独奏の華麗な演奏 技巧に彩られたフィナーレ。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

22

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 #短調 作品95 〈新世界から〉

作曲: 1893年/初演: 1893年12月16日、ニューヨーク/演奏時間: 約40分

アントニン・ドヴォルザーク(1841~ 1904) は、チェコの国民楽派を代表す る作曲家。ヴィオラを弾いていた彼が 作曲家として注目されるようになった のは、国家奨学金に応募した彼を、審 による。のちに、ブラームスは彼を出 版社ジムロックに紹介し、同社から刊 行された〈スラブ舞曲集〉は、瞬く間に 人気を得て、広く知られるようになる。 その後、交響曲などの創作で名声を築い たドヴォルザークは、1891年にニューヨ ークのナショナル音楽院から院長就任の依 頼を受ける。この音楽院はサーバー夫人に よって1885年に設立された。彼女はアメ リカ独自の音楽様式を確立させたいとずっ と願っていた。彼は1892年に院長のポス トに就き、95年までアメリカに滞在した。 交響曲第9番は、その時代の作品である。

アメリカ滞在中のドヴォルザークは、 休暇の際にボヘミア移民の入植地を訪れ、故郷の言葉で語り合い、母国の音 楽にノスタルジーを覚えたとされる。そ のボヘミアの音楽的エッセンスは、この 交響曲のとりわけ第3楽章に表れている。 一方、彼はアメリカ滞在中に黒人やネ イティヴ・アメリカンの音楽にも接しており、彼の当時の作品にはその影響も見られる。例えば、この交響曲の第2楽章や第3楽章は、アメリカの詩人ロングフェローの叙事詩『ハイアワサの歌』に霊感を得て書き上げられたという。交響曲第9番には、ドヴォルザークの、"新世界"アメリカの印象や故郷ボへミアへの想いが織り込まれている。

第1楽章 アダージョ~アレグロ・モ ルト ホ短調 ゆっくりとした序奏に 続き、ホルンが力強く第1主題を奏で る。この主題は、あとに続く楽章にも 用いられており、重要な役割を担う。 第2楽章 ラルゴ 変ニ長調 イングリ ッシュ・ホルンの奏でる郷愁ただようメ ロディは、「家路 | として知られている。 第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ ホ短調 躍動的なスケルツォ主部と、 性格の異なる二つのトリオからなる。 第4楽章 アレグロ・コン・フオーコ ホ短調 緊張感の漂う序奏ののち、金 管楽器が第1主題を堂々と鳴り響かせ る。このフィナーレには前の三つの楽 章の主題が用いられ、壮大なクライマ ックスを築き上げていく。

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル)、弦五部